

「それは又、何んな譯で。」と黄色いのも紅いのも掛け合と言ふので屹驚致しました。

「何んな譯、こんな譯と聞かんでも君達は自身のことだから好く知つてるだらう。何に知らん、花の咲いてるのを皆な枯して呉れると、これは飛んでも無い事を言ふ、一体お前達は此お庭に何んの爲に培はれて居るのだと思ふ?。」

と、聞いて黄色いのも紅いのもこれはと眞蒼になつて慄えだしました。

「花を咲けばこそ大事にして培て置くのだ、それに花の一つも咲かずに便々して居なから。却つて他の美しくい花を嫉んで枯らして呉れるなぞとは不心得極る。何うせお前達の根を嚙らうと思つて掛け合に來たのだから、ヨシ／＼そんな不心得なら枯れて仕舞ふまでお前達の根へ嚙り付いてや

るからさう思へ。

と、言へ捨てと止めるのも聞かずに根切り虫は歸つて仕舞いました。

さあ後で松葉牡丹は、何うかして助かり度と、いろ／＼工夫しましたが。

とう／＼根切り虫の爲に枯らされて仕舞いましたとさ。

(完)

次郎の海遊び

愛 鷗 生

次郎といふ小學校の生徒がありました、暑中休暇までは附添人に連れられて通いましたが、先生が自分の事は出來るだけ獨りでしななければ、終にはなんにも出來ない人になつてしまい、又住家の近いのに附添人に連れられて來る生徒は、弱い人

だと聞きました又たお母さまから獅子の子の話又はトランスバールといふ國には、十歳で國の爲に戦争に出たといふ勇しい噺や強い噺を聞きましたから次郎は強い人になりたいと思ひまして一人で通ふことに致しました。

學校が始まつてから二三日經た一日學校から歸りまして、お友だちとさんざ遊んで日が暮りましたから寢床へ入りましたが、お腹がぐるぐるとして遠い所の雷でもあるかの様に鳴始め寢返りをするとお腹の中で水が落ちる様な音がして、氣味が悪くなつてきました、其は先刻あまり騒いで咽喉が渴きましたから水を飲ました爲でありました、次郎は先に先生から「水の中には悪い病氣の虫が居て沸さない水を飲むと、其虫がお腹の中で澤山になつて暴れ回」といふことを聞て居ました

から益々心持が悪くなつてまいりましたが暫してうつうつと寢ともなしに寢ました。

さて朝起きて平日の様に學校へ行きました、學校は海近くに建られてありまして習字の先生が臨時欠席の時は、日によると草原や砂原へ連れて行かれることがあります、丁度此日は習字の先生が欠席で濱近の草原で遊で居りました、次郎は休課中暑い日は川で遊いで居りましたから大そう遊ぶ自慢で友達に慢り話の末とうとう海で遊で見せることになりました先生の姿が小山に隔られて有を好機とし飛込ました、之が大變な間違でありました、常に先生から隠れてするといふことは悪いことで、昔森蘭丸は隠なかつたが爲に御褒美を頂たといふことを聞て居たのです、此時に次郎は覺て居ましたでしょうか？次郎は自慢したいばかりに

海へ飛込ました、天氣はよし浪は静たし暫時遊て居ました、もうあがるうと思まして岸邊まで游着て立うと致ましたが、何うしましても立ませんばかりか沖の方へ引込まれそうです、何うしたのかと思ますと浦の子が云て居りました「いまさ」といふ沖の方へ引て行潮の中へ這入てしまつたのでした、此は大變と思て一生懸命游ましたが手や足が疲れてもう沈てしまひそふになりました、すると後から大きな濤がよせて來まして次郎を其中へ卷込で、微い軟い砂の上へ打揚ましたが、もう其處で氣絶してしまひましたのです、他の生徒はそら海へはまつたといふ騒で先生の處へ走附たので、先生は驚て飛で靴出になりました、其時は丁度次郎が濱へ打揚られた時であつたのです、どうでしよう陰でいたづらをする、こゝにいふことに

なるのです！、次郎は宛然死だ人も同じになつてしまひました、先生は耳の側で次郎々々とお呼になつた其聲が不思議です、次郎の耳へは毎朝起して下さるお母様の嬉しいお聲でござりましたそうです、次郎は氣が附て眼が覺て、海邊だと思いの外住家の例の衾の上で、枕元には上着も下着とさあお着なさいといふ風に待て居る、お床の上には机、机の上には本やミットが例日の通にありました、而して寢衣は汗で濕然として居りました、次郎はよくよく考てみると夢、實に夢で在たのです、昨日あまり水を飲過苦かつた爲に夢を見たのであります。

ぶた娘

はる子